

授業内外で自主的によく考える習慣づけの促進 —「クリティカル・シンキング」の活用—

保坂華子*

Fostering active thinking utilising critical thinking
by

Hanako HOSAKA

* School of Letters, Tokai University

概 要

「ものの考え方」指導は可能である。本論では、「思考の主体」である人がよりよく考えるには、「問題意識をもつ」→「意識して考える」→「習慣づける」という自主的によく考える習慣づけが必要であり有効であることを論じ、クリティカル・シンキングを考える習慣化の一助として活用して促進する工夫を取り上げる。なお本論では、「批判的思考」にとどまらず、より肯定的な「建設的多角的思考」としての「クリティカル・シンキング」を提案し、その方法論にとどまらず、ものの考え方の指導を追及し、柔軟な発想で考える力を育成し、授業内外で自主的によく考えられるように導くことを目指している。

クリティカル・シンキングを通して考える過程で、学生は多くの「気づき」を経験し、その気づき体験を通して「楽しい」「面白い」思考経験を積み、自主的に普段から考えるようになっていった。この点について、学生のフィードバックをデータとして分析した結果と照らし合わせながら実証する。

* 東海大学文学部英語文化コミュニケーション学科

1. 序論: よく考える能力の重要性

1.1 人は考える生き物である

人は日々考えている。意識的、無意識的に考えているにもかかわらず、考えることは「難しい」「大変」「しんどい」こととしてとらえられがちである。

その一方、人間は考えることで叡智を極めつつある。手に入れた高度な技術で、人工知能、ロボットやコンピュータ・スマホなど代わりに考えたり判断したりしてくれる“代用物”を作りつつある。しかし、そのような思考代用物となりうる高度な技術に頼って、人は考えることをやめてしまってよいわけではない。例えば、自動翻訳アプリ・ソフトは、簡単に多言語の翻訳ができる便利な手段となっているが、原則は人間が考えて言語を使うのであり、あくまでも言語を使える能力の自助であり、アプリ・ソフトが考えて言語化するような思考の代用とはならない。すなわち、人は「考える主体」であり、技術・機械は「それを助け実現する」という協働関係なのである。

本論では、「思考の主体」である人がよりよく考えるには、

「問題意識をもつ→意識して考える→習慣づける」

という自主的によく考える習慣づけが必要であり有効であることを論じる。なお、本論でいう「よく考える」とは、クリティカル・シンキングやロジカル・シンキング(論理的思考)を含む、論理的、客観的、総合的により深く考え、事象の真意やあり方を誠実に理解しようとするものである。

1.2 クリティカル・シンキング—考える習慣化のために

普段どのくらい考えているだろうか。自明の理と思って考えることを怠っていたり、「当たり前」「常識」という固定概念に無意識に縛られていたり、言わなくてもわかっていると思って説明を省略したりすることがみられることがある。日本を含む「高コンテキスト」型(Hall, 1976)の社会では、自分の考えがコンテキストから影響を受けやすく、自分の考えを表に出さない、もしくは出そうとしない傾向がみられる。例えば、学生の意見に「なぜ?」と問いかけると「何となく」「誰かが言っていたから」と答えが返ってくることが少なくない。また、自分が日常的に「こういうものだ」と思っている場合は、それを無意識的に前提にしてしまいがちである。

考える習慣化の一助になるのが、クリティカル・シンキングである。日常生活の中で、「当たり前」と思っていることは当たり前ではない、から始めて、客観的・論理的で偏りなく包括的に考える方法が「クリティカル・シンキング」である。クリティカル・シンキングの方法論にとどまらず、ものの考え方の指導を追及し、「考え方」をのびのび育てることが重要である。

1.3 クリティカル・シンキングとは

クリティカル・シンキングの定義はさまざまに試みられているが、定説を挙げるのは難しい。「クリティカル・シンキング」の定義の一例を挙げると、「何かを批判できるような自分の考え方を持つことだけでなく、目の前にある命題について、論理に基づいて、これでいいのか、という判断をするための基本的な思考方法」(Greene & Hunter, 2002:v)である。

その和訳にあたっても、辞書的には「批判的思考」という語があてられることが多いが、実際には「批判」を目的にするものではない。

また、山田・林(2011:1-11)によると、「メタ認知」(勝間, 2008 など)や「心の理論」(茂木, 2010 など)とともに、「リサーチリテラシー」(研究のための基礎力)の一つとしてクリティカル・シンキング(齋藤, 2009 など)が挙げられている。

「考える」というプロセスを論理的、客観的かつ建設的にできる能力は、「さまざまな学問領域、市民生活、職業において適用できる技能、転移可能な技能」としての「ジェネリック(汎用的)スキル」(楠見, 2012)の一つと考えられ、どの分野でもどんな場合でも活用できる。問題意識をもって考える、自分の生活に結び付ける、という行為を基礎から磨き直し、クリティカル・シンキングを「社会的実践力」として広く自由に活かせるようにすることが重要となる。

本論では、クリティカル・シンキングを次のように定義する。

本稿での「クリティカル・シンキング」の定義

＝入手した情報や他人の意見を鵜呑みにせず、あらゆる可能な側面から論理的に考えて吟味し、論理に問題があれば、代替案を見つけ提示する建設的かつ論理的な思考力・発想力。したがって、一見否定的な「批判的思考」にとどまらず、より肯定的な「建設的多角的思考」としての「クリティカル・シンキング」を提案する。

1.4 日本のクリティカル・シンキング研究動向

樋口(2012)や道田(2013)によると、日本でのクリティカル・シンキングに関する研究・教育は2000年以降盛んになっているが、「研究の深まりとしてはこれから」(道田, 2013:136)である。道田(2013)の指摘では、「何のための批判的思考教育か」を明確にし、実際の教育方法・実践方法の模索されるべきである、とまとめている。

酒井(2017:277-279)は日本のクリティカル・シンキング教育の推進に向けて研究を行い、その主な成果として以下の4点を挙げている。

- ①「クリティカル・シンキングが哲学的な探求のための力であるという認識を明らかにした」
- ②「文学の学習を、哲学的探求の学習と捉えた」
- ③「『哲学的』討論の方法論を明らかにした」
- ④「クリティカル・シンキングが探求のためのメタ探求力として抽出され、そのメタ探求力を、生涯に亘る探求力として教育の対象とするという認識を明らかにした」

それをもとに、日本のクリティカル・シンキング教育推進における具体的な方向性を提示している。(酒井, 2017:279-281)

- ①「クリティカル・シンキング教育の授業・カリキュラム開発」
- ②「普遍アプローチによる思考・哲学教育の導入」
- ③「クリティカル・シンキング教育を行うための教員養成教育・現職教育」

本稿は、このような方向性を鑑み、「考える習慣化」を目指すクリティカル・シンキング教育の方法を考察するものである。

2. 「考える習慣化」を目指す授業内容

2.1 「クリティカル・シンキング」を通して「考える」ことに導く

授業、勉強・研究という「枠(基準)」の中で始めるのではなく、日常の自分を取り巻く世界を対象にすることで、「自分の問題」として考える姿勢を基盤として培うことから「考える習慣化」に導く。

道田(2012)では、小学校における「よりよく考える授業」について検討され、「思考＝目標(＋意欲)→拡散→収束」というモデルが提示されている。よく考えることはこのようなサイクルが効率的かつ効果的に循環して思考が行われると考えられる。

その思考サイクルの基本として、授業内容の軸に次のクリティカル・シンキング要素3点をよく考える習慣づけに組み入れる。

よく考える習慣づけの基本となるクリティカル・シンキング：

① 自覚(問題意識)

「日常生活の中で「当たり前」と思っていることは当たり前ではない」ことを受け入れる

② 気づき(意識)

ものの見方は一つではない (=答えは一つではない)

考えることは面白い

③ (習慣づけに向けての)目標

「論理的で偏りのないものの考え方」を実践的に(かつ面白く)習得できる指導し、授業内外で自主的によく考えられるようになる

2.2 よく考える能力を引き出す授業

日常の「当たり前」の検証、論理的で偏りのない考え方「クリティカル・シンキング」を通して、考えることは面白く役に立つことを体験的に指導する方法を授業内外で実践し構築している。

2.1 の考える習慣づけの基本をふまえ、授業内容は大きく分けて次の3点で構成される。

授業内容の構成

① クリティカル・シンキングの基礎と方法の解説

② 考える課題に取り組む実践的思考の練習

③ 自主的なクリティカル・シンキング活用を目指す実践的思考活動

授業の受講者は1学期間で、ゼミ等ではより長期的に、それを実践して学びながら、実感して習得している。テーマは日常から英語的なものの考え方、より専門的な思考に徐々に発展させる。多彩な実例や考える練習を通して考える環境を整え、自分で考え「気づき」、「楽しい」「面白い」思考体験を積む中で、クリティカルな思考力を深め、自ら使えるようになり、学生はよく考える習慣を身につけ授業内外で実践できる力を育てている。

3. 学生を「考える」に引き込む工夫

3.1 「考える」を身近にする工夫

往々にして「考える」という過程は難しく、思考に「深さ」があり柔軟性が求められることを理解しにくい学生も少なくない。「クリティカル・シンキング」の受講者の自由筆記の感想の多くからも、受講前はクリティカル・シンキングにはなじみがなく、「当たり前」や「常識」についてそれまでは考えたこともなかった、とあった。

この状況を打破するために、

「問題意識をもつ→意識して考える→習慣づける」

という自主的によく考える習慣づけを進める必要がある。この過程を具体化すると、

表1 「考える習慣化」を目指す工夫例

工夫の種類	工夫の特徴	工夫の方法	思考の方向づけ
「考える」を身近にする工夫	思考活動への誘い	「考える」と構えさせない 「何となく」からの卒業 情報をよく吟味する	(前提や基準に縛られずに) 「自分ならどう考える?」 (ベスト・アンサーは?) =自由に考える
	狭 → 広 (多面的)	「視点」を変えてみる 「想像力」を鍛える	
	個 → 多 (個人的な活動から他者と関わる活動へ)	他の意見や考え方を聞いてみる 自分の考えを整理してひとに伝えてみる (フィードバックをもらう)	
	主体性	「自分の日常」につなげる(主体性をもつ)	
「考える種」の工夫	遠 → 近 (身近へ)	(ほぼ全ての人が実際の経験があるような)身近な問題 (「私だったらどうするか」と考えさせるような)具体的質問 「わからない」「知らない」と言わせないような内容	
	次へ	「次は何をするのか」と思わせるようなバリエーション	

身近なところから考えてみる → 「考えてみたこともなかった!」

→ 「面白い」「楽しい」→ 「気づき」→ もっと考えてみよう

のようになる。教育上の工夫としては、この流れの始めとなる「考える」を身近にする工夫が鍵になる。表1に「考える習慣化」を目指す工夫例を整理する。

3.2 「考える」に引き込む活動例

表1のような工夫例を総合的に活かした「クリティカル・シンキング」の活動例を以下に挙げる。実際の思考活動では、個々の工夫を取り入れながら自由に考えることを奨励する。

「クリティカル・シンキング」の活動例

- a. 客観的・論理的・多面的に考える
- b. 情報を整理して吟味する
- c. チェックリスト・順序・優先順位をつくる
- d. 自分の意見をきちんと整理して述べる・説明する
- e. 他の意見を開かれた心で聞き、自分の意見を述べる
- f. 同じ目的を達成するために話し合う・議論する

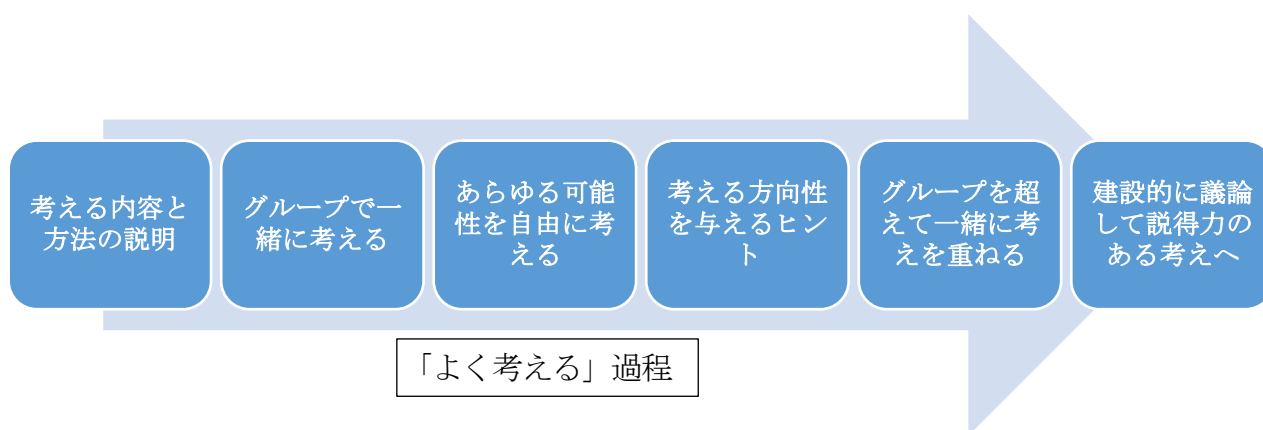


図1 実際の授業の流れ

考える習慣化の活動をする授業の流れを図1に示す。グループワークによって同じ課題でも様々な考え方に至ることも体験させることも可能である。図2のように、同じ題材で同じ資料を分類する課題では、グループによって全く異なる分類に至ることも経験的にかつ視覚的に学ぶことができ、どのように考えた結果でその分類ができるのかをわかりやすく説明させることで、自分の考えを客観的に見直したり、聞き手からのフィードバックから考えをより深めたりできる。

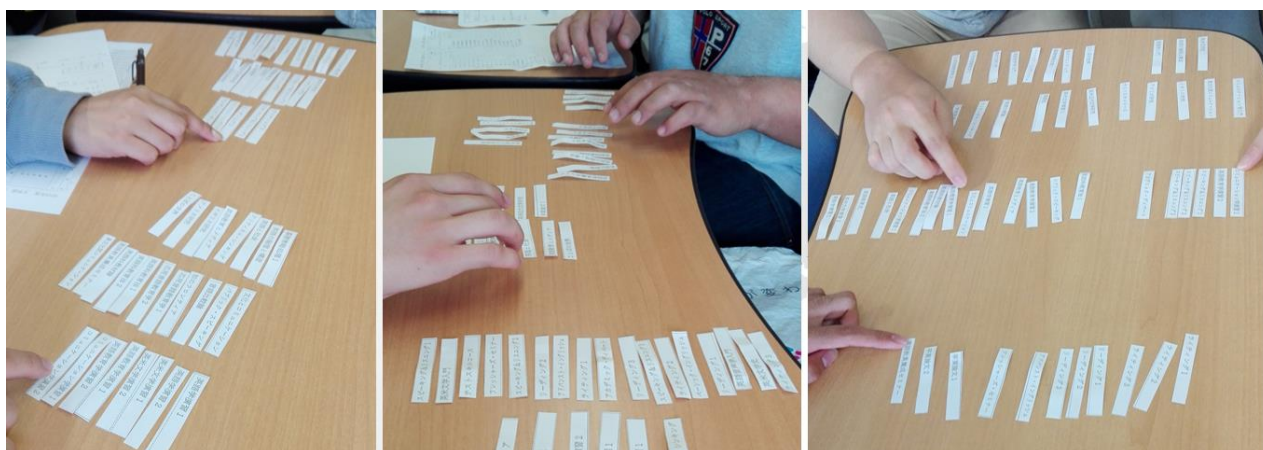


図2 同じものの分類を3グループで行った授業例

さらに身近にする具体例を表2に挙げる。上段から下段に向けて、遠い世界から直近の自分の環境へ、より自分のこととして具体的によく考える必要性が高くなる。本質的に同じような問題でも、抽象的な身近でない問いかけより、具体的で身近なすぐにイメージできる問いかけのほうが有効であろう。

表2 「英語第2公用語化」を考える

視点: 遠 → 近 (身近へ)	視野: 広 → 狭	課題: 概念的 → 具体的
世界的に「英語第2公用語化」が進んでいると思いますか?	遠い「世界」	抽象的で自分からは遠い問題として扱い、考えも浅くなりがちである
現在の日本で「英語第2公用語化」を進めるとしたら、あなたは「賛成」しますか、「反対」しますか? あなたの意見の理由・根拠を挙げてください。	広い「日本」	身近な問題だと真剣に考えるきっかけになる
あなたの大学でも「英語第2公用語化」を考えるとしたら、あなたは「賛成」しますか、「反対」しますか? あなたの意見の理由・根拠を挙げてください。	自分のいる環境	自分の世界が変わるような身近な問題だと、さらに真剣に考え自分から行動を起こすきっかけになる
あなたの学科で明日から全面的に英語のみにするとしたら、あなたは「賛成」しますか、「反対」しますか? あなたの意見の理由・根拠を挙げてください。	直接自分にかかわる身近な環境	自分の世界が即、今まさに変わるような身近な問題だと、一段と「どうするか」を真剣に考え自分から行動を起こすきっかけになる

普段、特に考えることを意識することなく日常を過ごしている学生が少なくないが、いかにあらゆる物事について意識してよく考えていけるか、また考えることは面白く役に立つことを体験的に指導するためには、表1で挙げた「考える習慣化」の工夫を表2のような授業内外で柔軟な視点で考える方法を日常から実践していくことが重要と考えられる。同じ問いに対する

答えも答えにたどり着く方法も一つではないことを示す表2のような活動は、考える動機づけになろう。

3.3 授業内・授業外・日常生活一般に共通すること

日常からよく考える習慣づけをするには、3.2 で述べたような考える活動を身近にする必要がある。しかし、実は普段から常に何らかの形で「考えている」。言い換えると、「意識してよく考えているか?」または「考えようとしていないか?」の問題ともいえる。学生には、授業中頑張っただけでなく、普通の自分で普通になっていることを疑ってみることの大切さを経験させ、あまり頑張らなくても身近にあることを考えてみるころから始めると、自分の発見を楽しむことができ、なお考える習慣として定着しやすいようである。

3.4 考察

本研究では、受講中の学生のフィードバックをもとに、思考を学ぶ過程から考え方にどんな変化があったかを過去5年間の受講生延べ約100名の内省を調査した。その主な方法として、①2.2 で述べた授業の受講者に対し、1つの考える課題ごとにワークシートを配布し、思考過程を書きながら視覚化し、自分の考えを整理する活動を積み重ねた。そのうえで、各課題の最後に「思考課題に関する感想と学んだこと」を記述させた。加えて、②同じ過去5年間の学期末の授業アンケート有効回答(2013年度21枚、2014年度16枚、2015年度13枚、2016年度10枚、2017年度20枚、合計80枚)の集計と、③参考として授業に第3者のインタビュアーが入った際の答えも参照した。

①の「思考課題に関する感想と学んだこと」と③の第3者インタビューでは、学生は考える過程で多くの「気づき」を経験していることがわかった。ワークシートでの記述のほとんどに、これらの気づき体験を通して「楽しい」「面白い」経験を積み、自主的に普段から考えるようになった、という受講者のフィードバックがみられた。次の受講者の声抜粋のように授業を通じて自分の考え方に変化を実感したもの、授業外でもよく考えるようになったものが内省として多くみられた。

受講者の声抜粋 (2016) : 第3者のインタビューでの答え

- a. 「クリティカル・シンキングという概念を知らなかったため、面白そうだなと思い受講しました。毎回のグループワークを通して頭の中で物事を整理し、多面的に見る方法を学んでいます。授業を通して、自分の物事に対する考え方などに大きな変化も感じることができています。」
- b. 「授業を通して固定概念やバイアスにとらわれずに物事を考えられるようになってきています。そのおかげで、わかったつもりになることも少なくなっているようにも感じています。」

受講者の声抜粋（2018）（付録の学生コメント抜粋参照）

- 授業で学んだ考え方を授業外での自分の生活に結び付けて具体的に考えている
- 学期末の最終課題後：授業外でも意識して考えるようになった
- 学期末の最終課題後：総合的に自分で様々な発見をして考える力をつけた

自発的に「なぜ?」と問いかけ、問題意識をもって考えて説明したりプレゼンテーションしたりする体験を積んでいくことで、クリティカルな思考力を深め、使えるようになり、結果的に受講者は授業内外でよく考える習慣を身につけていると考えられる。

②の過去 5 年間の学期末の授業アンケート有効回答合計 80 枚の集計で、「クリティカル・シンキング」を通じて得られたことを抽出したものが図 3 である。各問につきリカート式の 5 段階回答が設定されており、5 が「強くそう思う」、1 が「全くそう思わない」を両極として回答を選択させた。集計した 5 問は無回答も少数あったため、各問の回答数合計がすべて 80 枚になっているわけではないが、全体としての回答の傾向には影響がほとんどないとみなして集計した。

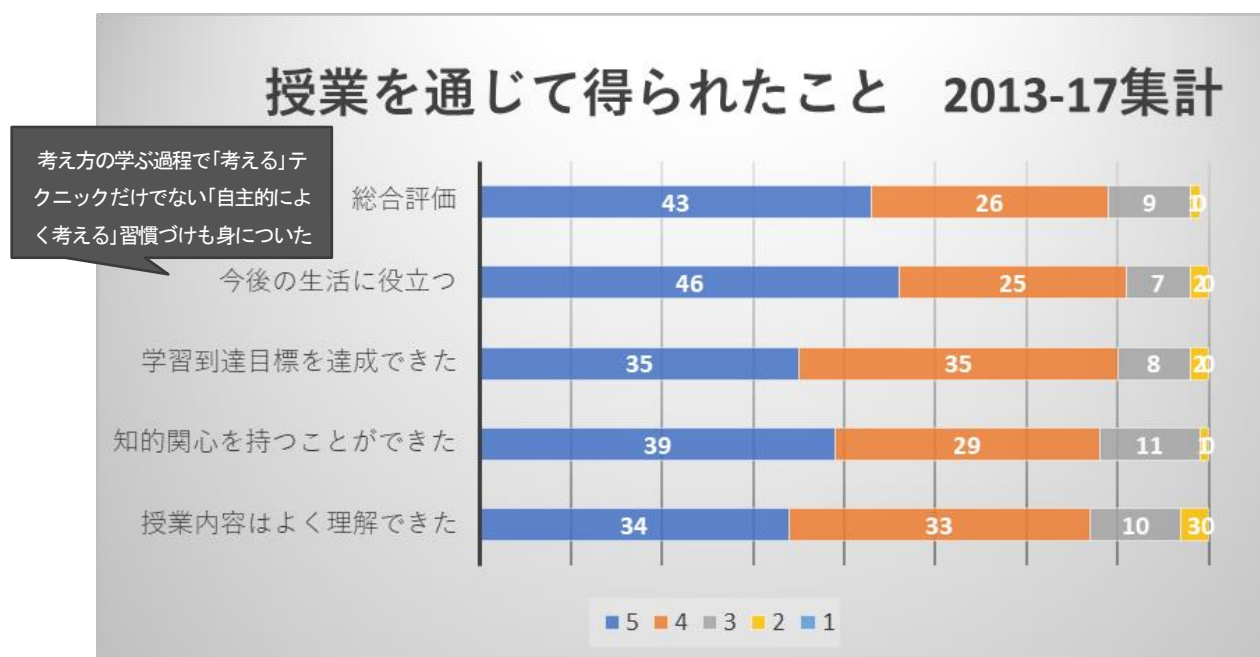


図 3 「クリティカル・シンキング」を通じて得られたこと

グラフ内の数字： 2013-17 年度の授業アンケート有効回答数合計

開かれた心で多面的に「よく考える」ということを「クリティカル・シンキング」を通して具体的に考え方を示し、実践させる経験を積んで体得することができることがわかった。図 3 でも 5 段階中の 5 と 4 を自己評価として出した受講者が「学習到達目標の達成」について 71.4%、「今後の生活に役立つ」について 72.4%となっている。各問で自己評価 3 以下であったのは、

約 10～15%にとどまった。肯定的でないフィードバックに至った自己評価 3 以下の受講者には、どのような指導や対応ができるのか追調査が必要である。考え方を学ぶ過程で、「考える」テクニックだけで終わらせない「自主的によく考える」習慣づけは大半の学生で自然に身につけているといえる。

4. 結論

「ものの考え方」指導は可能である。

考えることは「しんどい」が「楽しい」「面白い」ということを、「気づき」を通してクリティカルな思考力を深め理解でき、かつ授業内外で自主的によく考えるように習慣づけることはできる。

文理・分野・世代を問わずに、

1) 問題意識（「普通」、「当たり前」と思っていることは当たり前ではない）

2) 「よく考える」姿勢

3) 「考える」というプロセスを論理的・客観的・建設的にできる能力

を育てることは重要で、自主的によく考える習慣をつけることにつながる。

考える習慣化は、問題意識をもち、問題に対して意識して考え、そのような活動を繰り返すことで習慣づけるのが基本であると考えられる。「考える」ためのトピック選びとしては、純粋に①面白く、②身近で、かつ③今、④重要な(解決が求められている)問題であり、例が挙げられていること、がよく考える能力を引き出す授業に必要な要件であると考えられる。

クリティカル・シンキングの活用範囲は広範にわたるが、経験的によく考えるように導くのに有効で、思考力を高め、広くよく考える習慣づけには明示的な「考え方指導」が効果的だと考えられる。将来的には、大学に限らず広くものの考え方を習得・実践できるわかりやすい指導法、教材の体系化が必要であろう。

引用文献

Greene, David, Hunter, Lawrence. (2002) 『英語の論理で考えよう』 朝日出版社.

Hall, Edward T. (1976) *Beyond Culture*. Anchor.

(訳: エドワード・T・ホール (1976) 『文化を超えて』)

ゼックミスタ、E.B., ジョンソン、J.E. (1996) 『クリティカルシンキング 入門篇: あなたの思考をガイドする 40 の原則』 北大路書房.

勝間和代. (2008) 『起きていることはすべて正しい—運を戦略的につかむ勝間式 4 つの技術』 ダイヤモンド社.

楠見 孝. (2012) 「批判的思考について—これからの教育の方向性の提言—」 中央教育審

議会高等学校教育部会

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afile/2012/09/20/1325670_03.pdf (2018 年 11 月参照)

齋藤 孝. (2009) 『「読む・書く・話す」を一瞬でモノにする技術』 大和書房.

酒井雅子. (2017) 『クリティカル・シンキング教育:探求型の思考力と態度を育む』 早稲田大学出版部.

樋口直宏. (2012) 「日本における批判的思考研究の動向と課題 : 教育学を中心に」 『教育方法学研究』, 17. 筑波大学 人間系教育学域 教育方法学研究室内 教育方法研究会, 199-225.

保坂華子. (2018) 「授業内外で自主的によく考える習慣づけの促進: 自由な思考力を伸ばす「クリティカル・シンキング」の活用」 『第3回教育開発フォーラム—プログラム&授業研究会予稿集—』 東海大学教育開発研究センター, 9-12.

道田泰司. (2013) 「批判的思考教育の展望」 『教育心理学年報 第52集』 日本教育心理学会, 128-139.

道田泰司. (2012) 「小学校における「よりよく考える授業」とは」 『琉球大学教育学部紀要』, 81. 琉球大学. 163-181.

茂木健一郎. (2010) 『「読む, 書く, 話す」脳活用術—日本語・英語学習法』 PHP 研究所.

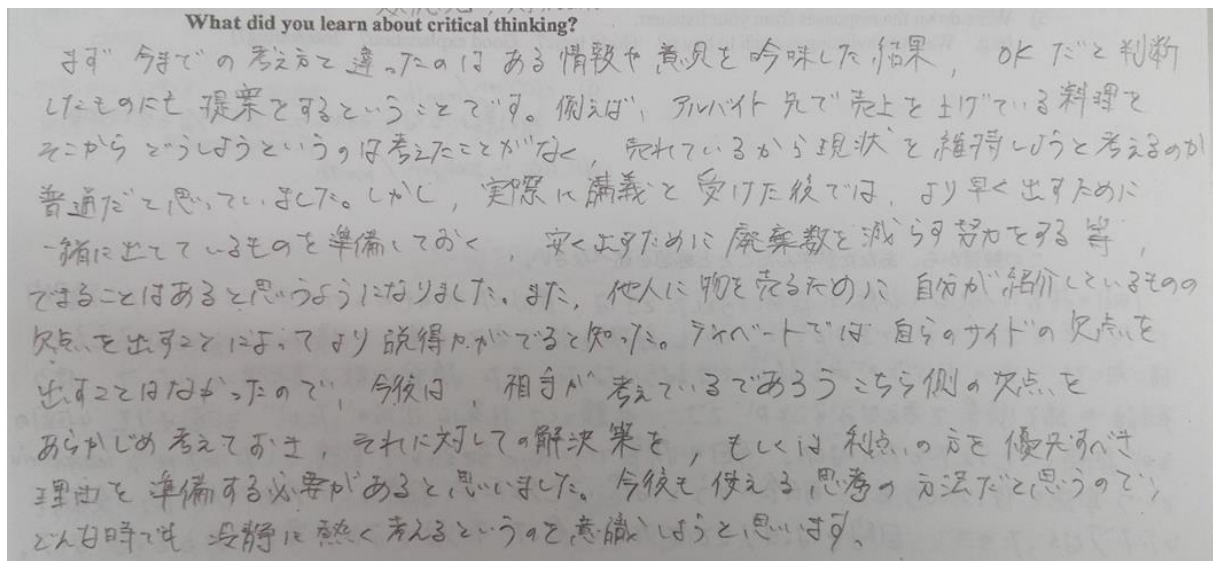
山田剛史・林 創. (2011) 『大学生のためのリサーチリテラシー入門: 研究のための8つの力』 ミネルヴァ書房.

東海大学 HP ニュース 2016 年 06 月 28 日

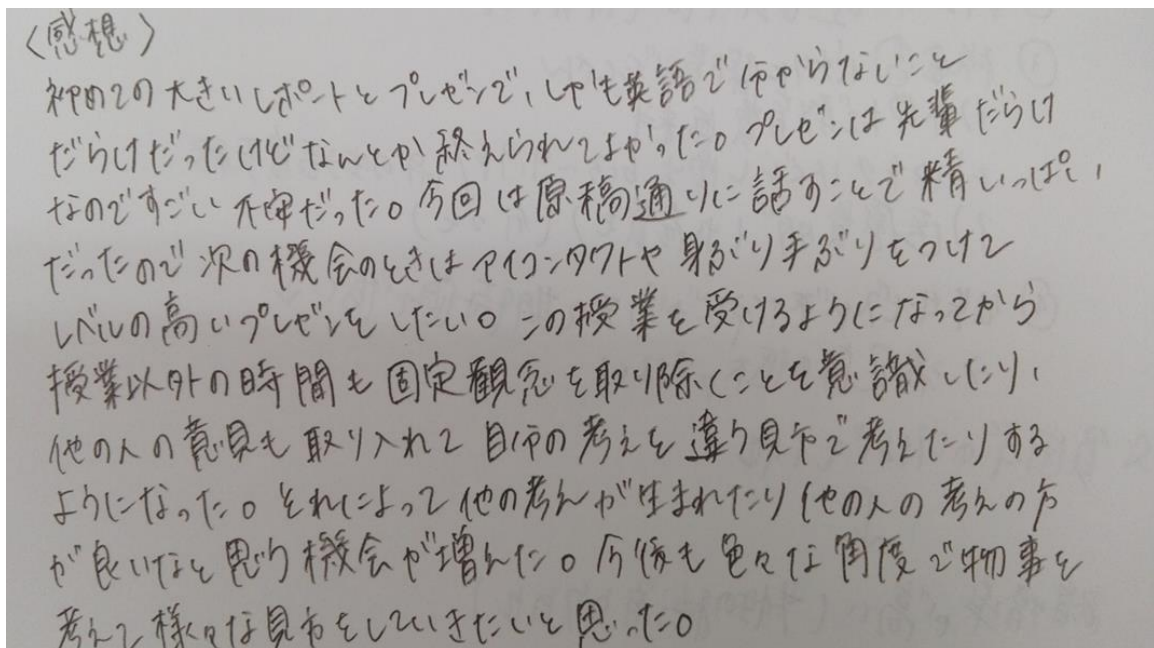
http://www.u-tokai.ac.jp/academics/undergraduate/letters/news/detail/post_54.html

付録：「クリティカル・シンキング」2018 年度受講者コメント抜粋

例1： 授業で学んだ考え方を授業外での自分の生活に結び付けて具体的に考えている



例2： 学期末の最終課題後—授業外でも意識して考えるようになった



例3： 学期末の最終課題後—総合的に自分で様々な発見をして考える力をつけた

この練習から、あなたが学んだことと感想を述べなさい。

この比較をやることで、どちらが劣っている、優れている(優)位なく、この場合こうであるということが上げられて、反対であるという点と甲乙がつけられない良さがあることを学んだ。また、クラスでプレゼンをやると、様々な国があってみんな違う理由で選んでくることがあるからさらに、多前は聞いたことがあるけど、具体的に知らない国もたくさんあり、紹介してくれた内容は発見が多くあった。棄てた国ランオンやたぐいのスポーツが強い国、計算が強い国。自分では機会が無い限り考えつけないようなアイデアがいろいろあった。他にも、プレゼンにみんなから評価やコメントをもらうことでさらにレポートが書きやすくなったように思う。国ごとに以前と比べて特色は違え、日本と比べているところ、違うところが全く違ったり。こうやって自分が見てきたことを共有すると、自分では見つけられないような発想に出会うことができ、楽しい。それと、話すことで何も手ばかりのいい相手にどこをどのように伝えるか、どう運んでいくか必死で話しながら考えなければならぬ。多面的な考えをもらって、自分でも出し相手に届ける。それが今回一番学んだことだと思われる。しかも、この授業で培ったプレゼンテーションを積極的に使えば、より豊かなアイデアでより大層な大学生活を送ることができる。

(2018年12月30日 受理)